

## 一 樛 棒 財 政 論

石橋湛山氏が大蔵大臣をされていた頃のことである。私は、石橋蔵相の下で予算編成の仕事をしていた。

その頃、私の生れた村（香川県三豊郡和田村）の村長さんは田中次郎という人であった。田中家一統は、私の村でも金持の方であり、次郎氏の家も勿論その一統に属していた。田舎の地主という地主が農地改革を契機として家運が傾いたのが多く、田中家一統もその例外ではないが、村長さんの家だけは、それ以前から稍々傾いていたように思われた。従って住居や庭は立派であったが、私の子供の頃から財政的には楽ではなかったようである。その村長さんから或る日のこと、私に宛てて、分厚な封書が届けられた。半ば好奇心も手伝って開いてみると、こつという意味のこととしたためてあった。

士議の顔素

「自分のうち、父が事業に失敗したので、当時中学に在学していた自分は退学した。大きい土蔵や物置は売り飛ばしてしまった。使っていた下男や女中は全部解雇した。事業に失敗した父と

しては、先ずこうするより他お家再建の糸口がなかつたわけである。

ところが、近頃の世相をみてみると、国は惨めな敗戦の憂き目をみたのに、義務教育は、六・三制とやらで六年を九年に改める。公僕たる役人の数はふえる。国有財産を思い切つて処分しようという勇断も見られない。これでは再建の目処が立たないではないか。

檜の木の養分が足らないときは、枝や葉を切り落して、いわば棒檜にしないと、その檜の木は枯れるにきまつている。一先ず棒檜にすることが、檜の木の命を救い、やがて年月が経つに従い養分が増すに応じて枝や葉をつけ、やがては、鬱蒼たる大木に成長することになるのである。

つらつら現在の世相をみて、深憂に堪えない。敢て拙文を綴り、貴君を通して大蔵大臣に建議する所以である。」

というのである。私は、その平凡な表現の中にこもる財政の哲理と、憂国の至情に打たれたのである。間もなく蔵相官邸で、石橋さんにその要領をお話したのであるが、石橋さんから、この献策に対するコメントを伺う暇もなかつたのである。

しかし、私は、今でも、田中村長の献策が正しいと信じている。簡潔に財政の哲理を説いて余すところがない。唯その後におけるわが国の中央、地方の財政が、田中村長の指向する方向に外れる許りか、曲つたり逆もどりをしていることに痛憤を禁じ得ない。

それでも私は決してこの問題を投げてはいないつもりだ。この哲理を具現する道は、強い安定した政治力が確立され、その政治力を賢明に行使用ることが絶対の要件になるのであるが、私はこの哲理を私の政治生活の導きの星として、その具現のために、私の一生を傾けたいと思っている。(昭、二八・八)

## 二 安くつく政府

終戦後芦田内閣が成立し、同郷の先輩矢野庄太郎氏が大蔵大臣に就任された。矢野さんは、大蔵省に初登庁の日、全省員を中庭に集めて一場の訓示をなされた。その訓示の中で、矢野さんはこういうことを言われた。「ともすれば諸君は役所の白紙で鼻をかまれる場合がありますね。若しその紙が白い紙で而も役所の紙でなくて、自分の紙であったとしたならば、果してその紙で鼻をかむかどうか考え直してもらいたい。」なかなか味のある訓示であったと思うが、聞いていた若い役人衆にどれほどの共感をかち得たかは判らない。

財 政 断 想

もともと人間は自分の物は大切にするものである。学校の机とか椅子とかは粗末にするが、自

分の机や椅子は大事にする。公園の樹木は平気で切り倒すけれども、自分の家の庭木は大事にするものである。それは確かに悪いことには違いない。然し人間というものは、もともとそのように不都合に出来上っているわけだ。お金についても同様なことが言える。自分の金は大事にするが、公の金は案外粗末にするものである。国のお金とか、公共団体のお金とか、会社のお金とかいうようなものは浪費され勝ちなものである。これも悪いことには違いないが、我々が日常経験する厳然たる事実である。

このことを頭に入れずにおいては、財政というものをまともに考えることは出来ない。財政というものは、財政学の教科書に書いてあるように別にむずかしいことではない。浪費され易い公の金をどのように有効に使うかということを考えるのが財政の仕事である。その儘ほっておけばどうしても粗末に使われ勝ちのお金を、どうして有効に活用するか、ということに財政制度のねらいがあるし財政家の苦心もある。又自分の金であれば大事にする。国民からその大切である金を税金の形で吸い上げるのだから、出来る丈税金を少くするということに財政のねらいがあり、財政家の苦勞もあるわけだ。要するに財政の哲理は税金を少くすることと公金を大切に使うことに尽きるといっても過言ではない。

アダム・スミスが、国家の機能を出来る丈制限して、市民社会により多くの自由を享受させよ

うとしたことや、近くは、アイゼンハワー大統領が安くつく政府 (Cheap government) を作り上げることに腐心していることも、煎じつめればこの財政の哲理を実践に移そうという苦心に他ならないのだ。

ところが、満州事変以後今日に到る迄のわが国の財政は、中央といわず地方といわず、膨脹に膨脹を重ねて来たし、税金は益々重くなり、全国津々浦々に怨嗟の声を聞くようになって来た。誠に悲しむべきことである。これからの政治は、この弊風を如何にして是正して安い政府をどうして作り上げるかということがその悲願であらねばならないと私は思う。

ところが、アダム・スミスの時代と今日我々の時代とを単純に同質と見てはならない。社会化 (Socialization) という過程が、社会政策或は社会主義というような思想に支えられて、社会の各分野に巨大な姿を現わして来たからである。この勢いは容易に減退するどころではなく、益々盛んになって来ている。その社会化の仕事の担い手たる政府の仕事は、並々複雑多岐なものになって来た。従って、安くつく政府を造るなどというのは、古ぼけた古典的思想であつて、この頃の新しい思想を誇る人々にとっては、沈鐘のうなり程の効目がない考えであるかも知れない。

なるほど近代国家の中で、この問題に心をくだいていない国は一つもないと言つても差支えない。唯私が憂うるのはこの社会化が行き過ぎになつては、いけないということである。社会化の

行き過ぎは社会化の敵である（Over socialization is antisocialization）。例えばイギリスの社会保障制度は誠に至れり尽せりのものであるし、アトリー労働党政府が八年の政権を勝ち得て、嘗々として築き上げたのは大きな社会化の建築物であるが、それが一つの大きな原因となつて全國民の活力が衰え、英國の国運が斜陽の憂目を見ていることも否めないことであるからである。

私に言わしむれば今頃社会化の必要を説くことがもつとも進歩的であるとしてゐる人々に対しては、物事をそう公式的に割り切つたり生硬に取扱つたりしないで、もつとねりになつてもらいたいと言ふことである。何故なれば社会化といふことはそれ自体をどこまでも貫くことが尊く且つ意味があるものではなく、それが育つ諸条件を充分わきまえてかからないと大きな過ちを犯すことになるからである。その条件といふのは、第一に先ず私的であれ、公的であれ、資本といふものが充實していなければ社会化の實りは乏しいものになるといふことである。形ばかり出来上つても、中味が貧血したものであつてはお話にならない。社会化の行き過ぎが資本を喰いつぶすといふことになる、最早それは社会化の敵となるからである。

第二に、社会化は國民の活力を阻むものであつてはいけぬ。遊んでいても喰える（Welfare without work）。病氣になつた責任も回避が出来るといふことになれば、これは確かに天国に違いないが、然しそれ丈に國民の活力と自己責任感が減退することになる。従つて國民の活力を殺

さず、而も自己責任の原則を貫徹して、なおどうにもならないというギリギリの限界から社会化というものの作業が始まるわけである。その限界をよく弁えておかないと事を誤ることになる。その限界をどこにしくかということが財政の大きな問題である。又一度その限界を拡げたら最後それを縮小するということが非常にむずかしいのが、社会化にまつわる宿命である。従つてその限界内に於て先に申した安い政府をどう切り盛りするかということがわれわれの課題になつて来るわけである。

資本主義も、民主主義も、十分育っていないわが国において、この生硬な地盤の上に、貧血した形ばかり立派な社会化の仕組が出来上つても、それでは本当の目的を果すことができない。われわれはもつと謙虚になつて、その地盤の育成のためにも、あるいは又本当の実り豊かな社会化を實行するためにも、現在の段階においては却つて安くつく政府をどうして打立てていくかに精進を惜んではいけないと思う。(昭、二八・八)